

この通信の著作権は妻中学校が有します。無断で文章・画像などの転載を禁じます。

第3回「さいと学アワード」開催！

8月1日、西都市内の中学三年生による探究学習の成果発表会「さいと学アワード」が開催されました。第3回目となる今回は、各チームの発表レベルが格段に高まっており、見る人たちに、中学生の地域課題探究に対する熱量や郷土愛が伝わり、感動を与えるアワードだったと思います。

本校からは「地域活性化に向けたPR動画づくり」、「西都産の食材を使用したお菓子の開発」(一・二組)、「西都市のお薦めの食べ物や飲食店をPRして西都市を活性化させよう」(三組)、「成果を意識したPR動

画の作成と活用方法の検証「祭りバージョン」(四組)、「西都で新しいお店を開くという夢を叶えましょう」(五組)という5つのプレゼンがなされましたが、どのプレゼンも実に見応えがあり素晴らしいと感じましたと思います。全グループの発表があつたという間の時間に感じられました。それぞれが質の高さを物語っていたと思います。どのグループが賞をとってもおかしくない素晴らしいアワードでした。三年生の皆さん、よく頑張りました！



オール西都校則検討委員会を開催！



7月23日、毎年の恒例行事となってきたオール西都校則検討委員会を開催しました。西都市では、三年前より全中学校が一つとなつての校則見直し「ルールメイキング」に取り組んでいます。その特徴の一つが主権者教育との連動です。ブラック校則対策として慌てていくつもの校則を見直すのではなく、学校生活におけるウェルビーイングを体現するため、当事者である生徒自身の主体性を高めながら毎年最重要項目を三つずつ見

直していくスタイルをとっています。検討委に先立って主権者教育の特別授業も行いますが、今年には本校の高橋邦夫先生とゲスト講師・走るリーダーに必要な資質とは？について対話的に考える授業が行われました。その後、髪結び方の緩和、「眉を整えること」、「微香料汗剤の使用等」についての検討が行われました。結果については二学期以降に生徒会より報告がなされる予定です。

夏休み期間中のできごとや大会参加！



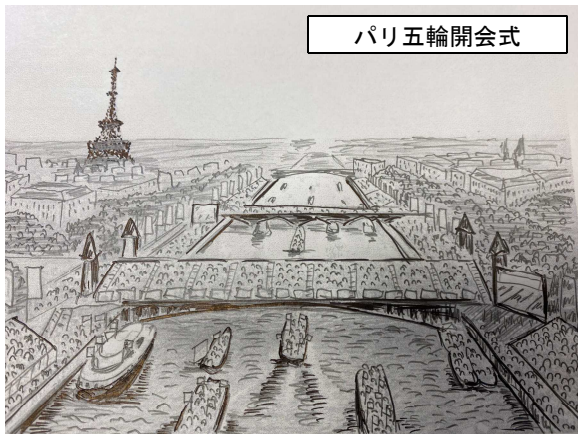
県大会で5年ぶりに優勝した弓道部

- 陸上部・松岡茉莉明さん(3年生)が、中体連の県大会(800m)で第1位となりました。松岡さんは、長崎での九州大会、そして福井県で8月に開催された全国中学生大会(800m)に出場し活躍をしました！
- 弓道部・男子団体が5年ぶりに県大会で優勝しました。弓道部は、長崎県の九州大会、そして東京で行われた全国大会にも出場し、全国でベスト16に入りました！

パリ五輪から考えたこと

近代オリンピックの父と言われるフランスのグーベルタン男爵によって広まった「勝つことだけでなく、参加することに意義がある」はよく耳にしますが、この言葉には、出場に至るまでのアスリートのたゆまぬ努力を称える意味と、国家間の争いを超えスポーツを通して平和を実現したいとの思いが込められているそうです。本校には全国大会に出場した生徒がいますが、五輪同様、参加に至るまでの並々ならぬ努力を称えたいと思います。

パリ五輪で特に印象深かったのは開会式でした。運営面や演出面では賛否両論ありましたが、「開会式は競技場で行進…」という既存の殻を破って新しいスタイルに挑戦した姿勢は心に残りました。自由を尊ぶ欧州の文化から、今後の教育にとって学ぶべき所は学びたいと思った夏の祭典でした。



パリ五輪開会式

三真の轍わたち

さいと学アワード考

表の

記事にもありますが、西都市では今3にさいと学の再構築を行い、義務教育のゴールの学習として、中3における地域課題探究が位置付けられ、その成果を各校代表者がプレゼン発表する「さいと学アワード」を実施しています。この学習企画は教職員だけで考えたのではなく、当事者である生徒や保護者、地域人材などによるワークショップを行い、そこでの意見を基に構築されている点が特長です▼今年で3回目となるこのアワードですが、その開催意義やクオリティに、ある種のブレイクスルーが起き、他に類を見ない「さいと学ブランド」が確立された気がしています▼そう感じた要因①

「開催意義」。通常のアワードは、賞を獲得して上位大会に進むことも出場チームの目標になりがちですが、さいと学アワードについて言えば、アワードの形はとるもののアワードではない。つまり、西都の地域課題と向き合ってきた中学生10チームの熱量が結集することで、賞とは別の新たな地域イベント的価値が創出されており、中山間地における新しい学びのモデルが確立したように思います▼要因その②「エンタメ性に満ちた探究の祭典」。上位大会がないため、このアワードが本市中学生達の探究のゴールとなります。

(もちろん高校ではまた新たな探究を発展的に継承するでしょうが...)。そのためか中学生達は実に伸び伸びとアウトプットを楽しんでおり、審査の評価基準とは異なるベクトルで聴衆へ伝わる伝え方を披露していたように思います。おそらく彼らには「自分たちの学びの成果をできるだけ楽しく伝えたい」という思いが強かったのではないのでしょうか▼「探究」の在り方についてはこれまで様々な議論・評価がなされてきました。マイプロジェクト(高校生対象)を主催するZPO(ゼン)は教師主導の探究を「操り型 お飾り型」と評してましたし、(株)教育と探求社主催のセミナーでは慶応大教授の鈴木寛氏が次のように述べています。「探究という学びは現在第三のフェーズに入ってきた。第一フェーズは一部の教師だけが熱心に取り組んでいた20年前。第二は文科省が学習指導要領に盛り込んでからで、多くの学校が探究に取り組み始めたがその内容や質はまちまちだった時期。そして今、探究をやるか否かという議論は既に終わり、どのようにやれば効果が出るかについて多くの教師が考える時代になった」▼昨年度からしか見てませんが、本校の生徒達は実に伸び伸びとさいと学を楽しんでくれているのが印象的で、それがアワードのプレゼンにもつながっています。操りやお飾りとは一線を画するさいと学ブランドが形作られつつあると思います。三年生、さすがです！(校長 伊東泰彦)

「探究」について

高校では令4より「総合的な探究の時間」が完全実施となりましたが、自ら課題を設定し、その課題と向き合いながら主体的そして協動的に学んでいく力が強く求められ始めました。激変する今後の社会では、従前のような「正解に早く辿り着く力」だけでは十分でなくなったからです。ペーパーテストでは測りにくいこうした力は探究的な学びの経験を通して伸びますが、各種アワードはもちろん入試の試問でも評価されるようになっていきます。主体性や(知的)好奇心によって伸長するこうした力と今後の社会(Society 5.0)との関連などについて次号で述べたいと思います。

※『参画のはしご』 ロジャー・ハート

子どもの主体性の度合いを8段階に分け、主体性の低い方から3段階を「①操り、②お飾り、③見せかけ」と評し、段階的に主体性を高めていくべきと提唱した。

